# Keiba Global Front Line

## 競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します

合田 直弘

3月30日にメイダンで行われた今年のドバイワールドC開催でも、2つのG1を含む3重賞を制する大活躍を見せたウィリアム・ビュイック騎手（30歳）が、今月のこのコラムの主役である。出身は北欧のノルウェイで、スカンジナヴィアにおけるチャンピオン騎手の座に8度就いた後に調教師に転身した父ウォルターさんと、馬術競技の花形選手として活躍した母マリアさんの間に生まれている。

そういう環境で育ったゆえ、三輪車よりも先に馬に乗り始めたのも当然で、毎朝起きるとまずはポニーを乗り廻し、それから登校する日々を過ごしたという。競走馬に乗り始めたのは12歳の時で、将来は騎手になると既に決めていた彼は、地元の中等学校に通い始めると夏休みは毎年のように英国に渡り、マーカス・トレゴーニング、アンドリュー・ボールディングといった調教師が営む厩舎で研修を積むことになった。

学校を出るとボールディング厩舎所属の見習い騎手となり、06年8月にデビュー。翌9月27日にソールズベリー競馬場で行われた開催のハンデ戦（芝8F）でポール・ダーシー厩舎のバンクオンベニーに騎乗して優勝。初勝利を挙げている。ちなみに、当時師事したアンドリュー・ボールディングの父で、ミルリーフなどを育てた元調教師のイアン・ボールディングは、デビュー前のビュイックを見て「これほど乗れる若者がいるのか」と驚嘆。「ビュイックが2020年までにリーディングジョッキーのタイトルを獲る」という賭けを、某ブックメーカーとの間にオッズ500倍で成立させたと伝えられている。

08年10月、自厩舎のブセラッティに騎乗してニューバリーのG3セントサイモンSを制し、重賞初制覇を達成。これを含めて年間で50勝を挙げたこの年、デヴィッド・プロバートと横並びで見習い騎手リーディング首位の座をつかんでいる。

09年10月、ミック・チャノン厩舎のラハリーブでウッドバインのG1EPテイラーSを制し、デビュー5年目にしてG1初制覇を飾ったビュイックは、年が明けるとニューマーケットのトップトレーナー、ジョン・ゴスデンからオファーを受け、厩舎の主戦騎手として騎乗することになった。

この年、英国におけるシーズンが始まる前の3月、ゴスデン厩舎のダーレミがブエナビスタを2着に退けてG1ドバイシーマクラシックを制した時、鞍上にいたのが当時21歳だったウィリアム・ビュイックで、おそらくは日本の競馬ファンの多くにとって、その名が記憶に刻まれた最初の機会となったはずだ。

10年9月、ビュイックは自厩舎のアークティックコスモスでG1セントレジャーを制し、クラシック初制覇を果たしている。

イアン・ボールディングの予言こそまだ実現していないものの、コンスタントに年間100勝をあげ、リーディング上位の常連となった彼に転機が訪れたのが15年だった。この年から、シェイク・モハメドの競馬組織ゴドルフィンと騎乗契約を結んだのだ。そしてこの年の3月、シェイク・モハメドの子息である皇太子シェイク・ハムダンが所有するプリンスビショップでG1ドバイワールドCに優勝。さっそく存在感を示すことになった。

そして、ゴドルフィンにとっての悲願であり、ビュイック自身にとっても子供の頃からの夢がかなったのが18年6月だった。チャーリー・アップルビーが管理するマサーに騎乗し、G1英ダービーを制覇。実にこれが、ゴドルフィンにとっては創設25年めにして手にした英ダービー初優勝であった。

昨年11月、ステルヴィオに騎乗してG1マイルCS（芝1600m）を制し、日本におけるG1初制覇を果たしたのは、皆様のご記憶にも新しいところであろう。

これから今シーズンの競馬が本格化するヨーロッパで、果たしてどのような活躍を見せるか、大注目のジョッキーと言えそうだ。